

私のカナダ旅行

内野栄子

四〇日間は、長いのだろうか、短いのだろうか。地理的にも、文化の多様性の上でも、また人の心もケタはずれに大きなカナダという国を理解しようとした私にとっては、それは短かすぎる期間だったし、一人の女の子としての私の心には、じゅうぶんすぎるほどの感動を与えてくれた期間でもあった。

カナダ旅行中、私は驚きづめであったような気がする。いわゆる名所はもちろんのだが、それ以上に私にとっては、自分の生活に今までかかわってなかった、おそらくカナダ人にとっては生活のコマにしかすぎないことがらが、とても新鮮に感じられた。想像した以上の木々の多さ、潤沢に使われている水、決して大きくはないが、どこかのびやかに建つ

家々……。そしてふと時計を見ると、夜の八時になっているというのにあくまで青く、明かるい空。

話で聞き、本で読み、頭で理解していたはずのことが、現実になってみると、こころも異なっていて感じられるものか……。既製の観念を捨て、素直に驚くことこそが、カナダという国を知るのに最良の方法なのだ、と私はそのとき強く感じた。

カナディアン・ロッキー

まずカナディアン・ロッキーの景観がすばらしかった。冷たく澄み切った空気の中、私の眼前に次々と現れる、壮大な錦絵。サファイアの一枚板のような、石を投げれば壊れてしまいそうな湖面に写される山々は雪を頂き、木々は空を突き刺すように真っすぐ伸び、その中に生き生きと活動する、人を怖れないリスや大角鹿、そしてコヨーテの子。すべてが私の中に驚きを呼び起こさずにはおかない。

「カナディアン・ロッキーだけでカナダのイメージを作らないで欲しい。それだけがカナダではないのだから」という、多くのカナダ人の言葉を私は想い起こしていた。しかし、それは無理ではなからうか。自然の景観だけで、私たちの心はじゅうぶんすぎるほどに満足してしまうのだから。

カナダの最南端は、カリフォルニアの北端より南にある。ポイント・ピリーというその国立公園で、初めて五大湖を見

たときの驚きも忘れられない。白い砂浜には波がうちよせ、水平線まで、眼をささぎるものはない。私にはどう見ても海にしか見えないのだが、何度なめてみたところで、水は塩辛くはない。この遼方もない広がり、高速道路を走っている感じられるのと同じように、私の感覚ではとらえきれない大きさというものを強く感じさせてくれた。時速百五〇キロで走っても、どこまでも真っすぐに地平線へ向かって伸びる道路も、見わたす限り的小麦畑も、轟々たる音をたててなだれ落ちるナイアガラの滝も、大西洋岸の、川上へと逆流する潮の流れも、すべてがじつとしているとちっぽけな私など呑み込んでしまいそうな、茫莫とした広がり、で私に迫って来た。

いくつものカナダ

カナダを巡って、まるでいくつもの異なった国々を訪れたように思えるのはなぜだろうか。カナダを訪れる前、私は「カナダの内包する文化は、英国系、フランス系の二つに大別されるだろう」と考えていた。ある意味で、それは誤りだった。確かに、大きな目で国家的規模での文化というものを考えれば、英国系、フランス系の文化が、ダイナミックな米国の文化と対応して、とらえられるかもしれない。歴史的にも、英国、フランスの対抗の中にカナダは生まれ、育ってきた。しかし、個人の生活のレベルでカナダの文化をとらえようとすれば、様々の生活

様式、態度の違いが見えてくる。例えば、兄の友人の若いカナダ人と話していたとき、話がなまたまオリンピックのことに及んだ。「日本は体操とバレーボールが強い」「カナダはウィンタースポーツすべてに強い」——とそこまではよかつたのだが、そのあとは、各人各様の、父祖の国の応援だった。両親がフィンランドから来たという女の子は、フィンランドの距離スキートの強さを言い、英国系の少年は、英国の馬術の強さを、ドイツ系の女の子は……という具合である。



「What's your nationality?」という言葉が「あなたの国籍は？」ではなく、「あなたは何系なの？」の意味で飛びかい、〇〇系カナダ人であることに、父祖の血に、そしてその文化に、みんなが誇りをいだ